

☒Stand☒ up
PrettyDerby

雲愛雲逮

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

これは——異世界の競争馬の記憶を持つ一人のウマ娘が成長する『物語』
彼女の名前は『スローダンサー』

遠い遠い『奇妙』な世界で、過酷なレースを走り抜いた“駿馬”だ

目次

鈍間な踊り手（スローダンサー）

1

永遠なる皇帝（シンボリルドルフ）

9

戦乙女（ヴァルキリー）

19

鈍間な踊り手（スローダンサー）

『飢えなきや勝てない。ただしあんな“Dio”なんかよりずっとずつとともつと気高く
『飢え』なくては——』

——夢を見る。

どこまでも貪欲な瞳をした半身不随の青年の姿。自分の求める『結果』の為ならどんな非情な決断すらも下せる『漆黒の意思』をその魂に帯びさせた“ぼく”の相棒。

『ジョニー！』『Lesson5』だ……そう、確か次は——『Lesson5』だ』

——夢を見る。

『罪』を裁くものでありながら偽りの『罪』の為に命を懸けた男の姿。

ジョニー……相棒と共に再び『歩き出す』為の道を駆け抜け先祖より『回転』を受け
継いだ戦友。

『オレはこのSステイール・ボール・ラン B Rレースでいつも近道を試みたが『一番の近道は遠回りだった』……『遠回りこそが俺の最短の道だった』……この大陸を渡ってくる間ずっとそうだった……そしておまえがいたからその道を渡って来れた……』

——夢を見る。

まるで生涯の最期に伝える言の葉のように想いを紡ぐ“ジャイロ”の姿を。

『これから行われるのは『生贄』だ……お前……“ジョニー・ジョースター”——試練は、流される血で終わる』

——夢を見る。

大国の命運をその傷だらけの背に背負った男の姿。

どこまでも自分にとって、ひいては民の為に『正しい道』を進み続けた、相棒ジョニーとは真逆逆の正義。

『ジャイロはこの為に……Lesson5はこの為に……ッ！』

本当に本当に……なんて遠い廻り道……

ありがとう……ありがとうジャイロ。

本当に……本当に……『ありがとう』……それしか言う言葉がみつからない——』

——夢を、見た。

動脈を切断され息絶え絶えな “ぼく” の瞳が映した『相棒』の姿。

親友の死に慟哭しながら感謝を伝え——このレースを駆けた自分にとっての回転オリジンを放つ。

あの日から一夜たりとも欠かすことなく……まるで “思い出す” かのように、そして『物語』を読み解くように “ぼく” はその夢を見る。

それは——本当に『奇妙』な記憶ユメだった。

偏西風の彼方で、灼熱の荒野で、無謬の凍原ツンドラで、数多もの山脈で——数えきれない程の難関を乗り越えてきた “ぼく” の記憶ユメ。

総距離約6000kmに及ぶ、史上初の乗バによる北米大陸横断レース。
言葉にしてみれば本当にバ鹿バ鹿しいと思う。

十九世紀後半に行われた未曾有の祭典、不可能への『挑戦』とでも言うべき116日にも及ぶ無謀なレース。

更には聖人の遺体ミイラを奪い合った壮絶な『闘争』の日々。

だけど『ぼく』は走った。二人の人間と一頭の『戦友』と共に、その不可能とも言える旅路を……といっても、ラスト数キロメートルで失格になっちゃったけどね。

だけど、そんな過酷な挑戦の中でも『ぼく』は最高の騎手ジョッキーに恵まれていたんだ。

『僕はまだ『マイナス』なんだッ！』

『ゼロ』に向かって行きたいッ！』

お世辞にも性格の良い聖人君子とは言えない半身不随の青年。諦めが悪くて、最後まで折れず、レースを通して『成長』した『彼』は——現世いまの『ぼく』にとって尊敬すべき人だと思う。

——“ぼく”の名前は『スローダンサー』

異世界の名バの名前と魂——そして記憶を引き継いだ、一匹のウマ娘だ。

——ウマ娘。

それはこの世界に存在する新たな可能性。耳と尻尾の生えた、人間とちよつとだけ異なる神秘的な種族。

異世界の競走馬の“名前”と“魂”を受け継いで生まれてきた少女たちは、数奇で輝かしい歴史を受け継ぎ走ることを運命と定める——『奇妙』な存在だ。

ウマ娘は走ることに憧憬を抱く。勿論、ただ街道を走るなんてチャチなもんには引かれてるわけじゃあない。

『トウインクルシリーズ』と呼ばれる国民的スポーツ・エンタテイメントで、超人的な走力を持つウマ娘たちが繰り広げるレースの総称。この世界の祭典だ。

GⅢ、GⅡと区別され、最後には頂点の『GⅠレース』が存在する。このレースに参

加することはウマ娘にとって最大の榮譽と呼ばれ、[〃]ぼく[〃]達の多くはその『GI』で勝利することを夢見ている。

他にも日本ダービーに代表される三冠レースなんでもものもあるけど今は割愛しよう。

[〃]ぼく[〃]——『スロージャンサー』は、一人のウマ娘としてこの世界に生を受けた。

そして[〃]ぼく[〃]には他のウマ娘とは違い『異世界の競争バとしての記憶』が存在している……と言つても、赤ん坊の頃からこの記憶があつた訳ではない。

物心がついてから少しづつ……一夜一夜、物語を読むようにして思い出していったんだ。

最初は複雑な気分だった。異世界に存在していた四足で走る[〃]スロージャンサー[〃]の姿や当時の年齢もそうだけど、自分の背中に[〃]人[〃]を乗せて走るなんてあまりにもバカげてゐる……でも、[〃]彼ら[〃]を観ていくうちに[〃]ぼく[〃]のそんな考えはどうに消えていった。

[〃]彼ら[〃]は……本当に素晴らしい人間だった。

いつだって遠廻りしながら最短の道を辿る戦友と、道を踏み越えていく中で『成長』していく最高の相棒……[〃]ぼく[〃]は本当に良い人間に巡り会えた。

多分[〃]ヴァルキリー[〃]も同じようなことを思つてたんじゃあないかな。

「そしてここから始まるんだ——現世いまのぼくの物語が」

そんな『奇妙』な冒険を記憶として持つちよつと変わったウマ娘である『ぼく』は今、新たな門出を迎えようとしている。

目の前には舌を巻くほどの大きな建物。

門の付近に立てかけられた『慶祝ツ！入学式』とやたら達筆な文字で書かれた立看板。更には『ぼく』と同じようにこの『学園』へと足を踏み入れるウマ耳と尻尾の生えた女の子たち。

——トレセン学園

正式名称は『日本ウマ娘トレーニングセンター学園』。そこは『トウインクル・シリーズ』デビューを目指すため、ウマ娘たちが通う全寮制の学園。そんな凄い学園の敷居を今『ぼく』は跨またごうとしている。

この『物語』は

『ぼく』が成長する『物語』だ

肉体が…と言う意味ではなく
青春から大人…という意味で。

もう一度自己紹介をしようか——“ぼく”の名前は『スローダンサー』
異世界の駿バの名前と魂、そして記憶を受け継いだ——少しばかり『奇妙』なウマ娘
だ。

永遠なる皇帝（シンボリルドルフ）

——ぼくは今、このトレセン学園の入学式に参加している。

周りを見渡せばぼく以外にも沢山のウマ娘がこれからの生活への期待と不安を入り混じらせながら、落ち着かない様子で新入生用に準備された椅子に座っている。

そしてそんな緊張の中で式の始まりを今か今かと待ち侘びるその時——一人の女の子が目の前の壇上に姿を現した。

室内だというのに当然とばかりの被られた帽子。

一見すると幼児にしか見えない背丈。

広げた扇子に書かれた立て看板と同じ筆跡に見える達筆な『慶祝ッ！』の文字。情報量の多さに一瞬頭に疑問符を浮かべてしまう。

それはぼくだけじゃなくて他のウマ娘達も同じみたいで、周りから少しばかりのざわめきが聞こえて来る。

そしてそんな疑問の渦中とも言える壇上の少女は、ぼくたち新入生を一瞥し微笑みを

浮かべ、講演台に設置されたマイクを手を取った。

「歓迎ッ！ようこそ、トレセン学園へ！」

……ふわあっ!?

思わず驚嘆が声になって出そうになるのをなんとか堰き止める。

びつつくりしたあ……。

他のウマ娘たちも同じみたいで、みんなびくりと一瞬体を震わせていた。

それにしても……ようこそ？あの女の子はこの学園の関係者なのだろうか…それとも遊び半分で登壇してきた幼女の悪戯いたずらかな…？

「失敬ッ！少し張り切りすぎてしまったようだな」

ぼくがそんな風に考察していたら、再び少女が先程よりも小さめの音量で言葉を紡いだ……つて、マイク通してるから普通に大きすぎるくらいだけど。

「紹介ッ！わたしこそ、このトレセン学園理事長——秋川やよいである！」

……まじで？

このロリっ娘が理事長……？悪戯とかではなく……？

呆然としながらそんな事を考えていたら、いつの間にか『理事長』と書かれた扇子を広げた自称学園のトップが自信満々なドヤ顔で自己紹介を終えた。

だけど他の教員や数人の先輩ウマ娘の方々が少し呆れたようにため息を吐きながらも静観しているのを見る限り、とりあえずは本当の事みたいだと疑問だらけの自分を無理矢理納得させる。

「以上ッ！これにて理事長わたしからの祝辞を終えんとする！」

いや、貴女まだ自己紹介しかしてないでしょう……。え、マジで終わるの？なんかこう……人間の学校特有の偉い人の長い話とか、これからのウマ娘生でためになるお話とかないの……？

「引継ッ！次は生徒会長——シンボリルドルフからの祝辞だ！」

どうやら本当に自己紹介だけで終了のようで、後釜を指名するかのように後任の名前を呼び、まるで嵐のように理事長……は壇上を去っていった。

「なんだったんだ、あれ……？」

思わずそんな不敬とも取れる言葉が息をついて出たけど、仕方がなかったと思う。

現にぼく以外の娘たちも皆、常識外れな理事長の登壇と下壇に唾然としていたのだもの。

そして入れ替わるように壇上へと足を踏み出し登っていく会長さんにはさっきの理事長のような反応に困ることは止めて欲しいな……。

なんて事を考え——ぼくは、言葉を失った。

それは決して、登壇した彼女が奇怪な見た目をしていたからではなかった。

むしろその逆。整いすぎた容姿に三日月を思わせるメツシユに艶のあるセピア色の美髪。だけどぼくは、その眉目秀麗な容姿に言葉を失ったわけではない。

「——今し方紹介に与^{あずか}った、私はこのトレセン学園の生徒会長 “シンボリドルフ” だ。

今日、これだけ多くのウマ娘が我が校の門を叩いた事を嬉しく思う」

そのウマ娘は、生き物としての『格』が違った。

自分は勿論、周りの娘とも比較にならない『別格』の存在。

厳粛な姿勢から見せるその威光……『カリスマ』とでもいうべき圧にぼくは気圧されていたんだ。

シンボリルドルフ…シンボリルドルフ……。

心中で彼女の名前を反芻はんすうしながら、ぼくは目の前に君臨するウマ娘の情報を引き出す。

『皇帝』——シンボリルドルフ。

数少ない三冠ウマ娘。さらに言えば『無敗』でその偉業を達成した、この世界でも頂点トッポに近いと囁かれる最良のウマ娘。

誰かが言った——「レースに絶対はないが、そのウマ娘には『絶対』がある」
「幾多もの勝利よりも、数少ない敗北を語りたくなるウマ娘」だと。

だが実際目にしてみれば、噂なんて簡単に真に受けるべきではないと確信する——
何故なら『皇帝』は、そんな囁かれ続けた噂なんかよりもずっと別格の『規格外』だと初見で思い知らされたのだから。

「君たちも知っている通り、我がトレセン学園は『トウインクル・シリーズ』デビューを目指すウマ娘たちの育成に力を入れ、将来活躍する『未来の憧憬』スタを輩出する事を生業としてしている——だが」

生徒会長としての肅々とした言葉を紡ぎながら、シンボリドルフ 皇帝はぼくたち新入生を一瞥した。

「前途遼遠、その道のりは厳しいものだ。ぜんとりようえん

努力が実を結ばず挫折を経験し、失意のまま学園を去る者は例年少くはない」

場内が、少し騒めく。

『無理もない』と、ぼくは思った。

新しい門出に胸を躍らせ明るい未来を夢見た途端、祝辞の場で不安を煽るような言葉を告げられたのだ、これで平常心ながらに静聴の姿勢を保っているウマ娘の方が少ない。

「——それでも」

——騒めきが、しんとした静寂へと変わる。

「君たちが不変の『覚悟』を抱き、この『暗闇の荒野』に自らの進むべき道を切り開ける未来が来ることを——今は祈らせて欲しい」

ぼくは、そんな真摯な態度で『期待』を口にする皇帝に既視感を覚えた。

一点の曇りすらないその心と行動、統率者としての威光。

そう、まるであの合衆国大統領フアン・ウァレンタインと同じものを彼女から感じたのだ。

勿論、それは侮蔑や悪い意味を込めた印象じゃない。彼が行った遺体篡奪のための命令や行動は残虐非道に見えたが、彼は自国への確固たる『愛国心』をもつてその誇りを懸けていた。

「ジョニイだつて」 少なくとも自分よりは人として『正しい道』を歩いてる」と認めていた程だ。

だからこそ、そんな多くの民の安寧と幸福と繁栄を願った統率者プレジデントと同じく、彼女はきつと『正しい道』を自分の意思で進むことができる人だと確信した。

「唯一^{Eclipse first}抜きん出て、並ぶものなし^{the rest nowhere}——我が校の校訓だ。

端的に述べるなら『勝利』……つまりは一着を至上とする言葉として用いられるが——その道程に於ける『敗北』に価値がないという意味ではない」

勝利を目指すうえで『敗北』、ぼくはそれを嫌なほど知っている。

あのステイル・ボール・ランレース。過酷な旅路の中でぼくは幾度もの『敗北』を味わって来た。

スローダンサー^くのような年老いた老バの脚やスタミナじゃとても追いつけないような駿バたちの疾駆。

他の若ウマよりも経験と知恵^{ジヨ}があり天才騎手^{ニイ}が手綱を引いてくれたとはいえ、各コースでの惜敗は避けられず悔しさを嘔み締めていた。

ただどその敗北を乗り越えながら、ジヨニイは『成長』し、老バのぼくでもあのレースを走ることができたんだ。

……だけど、最後の最後の残り3キロでのスローダンサー^ほの『失態』がなければ……あの『ブルックリン橋』でスローダンサー^くが——いや、今はよそう。

自分の不甲斐なきに耽つて貴重なお言葉を聞き逃すのは、会長に対して少しばかり不敬だしね。

「私も含め、ウマ娘であれば皆経験するこの『挫折』を乗り越え^{じくじ}忸怩たる思いを糧とすることこそが、このモットーの真髄だ……私は君たちにも歴々の先人方と同じく、そうやって成長してほしいと思う」

生徒会長が言葉を区切ると、次の瞬間——場内の静寂は礼賛の拍手に打ち破られた。先程まで不安そうに将来を思索していた娘たちは皆、勇ましい顔つきで自分の憧憬^{ユメ}を叶えようと『覚悟』を決め手を叩いていたのだ。

それは、ぼくだつて例外ではない。

会長の言葉に胸が躍った。希望を見出した。

いつも夢に見ていたジョニイやジャイロのような一握りの『輝き』を持つ人間の生き様、大統領^{ヴァレンタイン}以外にも、ぼくはいつの間にか「彼ら」のことも目の前のウマ娘に重ねていたのだ。

そして皇^{シンボリドルフ}帝という名の偉大な先駆者^{ウマ娘}の話を拝聴できたこの数分。それだけでも、ぼくはこのままトレセン学園の一員となれて『良かった』と心の底から思う。

「これより由緒正しいトレセン学園の生徒として、走りに勉強に『意気揚々』と励み―悔いのない日々を『生きよう』ではないか……………ふっ」

……………ん？

「『意気揚々』と『生きよう』……………ふふふ…」

……………。

【スローダンサーのやる気が下がった】

戦乙女（ヴァルキリー）

……なんだかぼくの中の憧れが音を立てて崩れたような気がするけど、とりあえず入学式の感想は『素晴らしい』の一言だ。

威厳を見せながら夢ばかりの道ではないと叱責し、同時にぼくたちの『闘争心』を巧みに引き出したルドルフ会長の演説は確かに『素晴らしい』と称するに相応しいものだった。

……最後の極寒ダジャレ冗句さえなければ。

いや、もしかしたら新入生のぼくたちの張り詰めた緊張を紛らわすためにわざと……？

でもルドルフ会長自身も自分のギャグに笑ってたしなあ……。

「よし、この事はもう考えないことにしよう」

そうだ、そうしよう。

確かにハイテンションロリっ娘理事長に『やる気』の下がる駄洒落なんかもあつたけど、ルドルフ会長のお言葉自体は念頭に置くべき至言であつたのは間違いなかつたからね。

そんな事を考えながらぼくは今、これから日常での生活を送るための寮へと歩を進めていた。

入学式が終わつた後。ぼく達新入生は教室で学園について先生から軽い説明を受けて、今日のところは寮の確認と寮長への挨拶のため解散、と告げられ今に至る。

それにしても寮生活か……ルームメイト……先輩との交流……新しい出会い……うん、なんだか凄くわくわくしてきたな。

「ぼくの寮は確か『栗東寮』だっけか。それにしても、これだけ広いと流石に疲れるな……」

そんな事をぼやきながらも広大な敷地を歩き回りレース場の下見などもついでに済ませたぼくは、なんとか道に迷うなんてこともなく『栗東寮』へと辿り着いた。

「えっと、まずは寮長に挨拶を——」

「見ない顔だな。栗東寮の新入りかい？」

寮内へと足を踏み入れようとしたその時、背後からの声に呼び止められる。

振り返ればそこには一人のウマ娘がいた。

……改めて思うが、やっぱりウマ娘のみんなは凄く顔が整ってるな。

ルドルフ会長の凛とした御姿もそうだけど、目の前の先輩と思わしきウマ娘も街中を歩けば10人中10人が振り返るような美貌をしている。

短く切り揃えられた黒髪に目測で170センチ近い身長をした名も知らぬ先輩は、ルドルフ会長とは違った「王子様」と言った印象を抱かせる容姿だ。

……と、見惚れてる場合じゃない。とりあえず自己紹介しないと。

「はい、今日から此処でお世話になります。新入生のスローダンサーです！」

「そうか、新入生か……この栗東寮の寮長を任されている「フジキセキ」だ。よろしく、スローダンサー」

フジキセキ先輩は自己紹介の後に少し考える素振りを見せると、いたずらっぽい笑みを浮かべる。

「丁度いい。他の新入生が来るまで時間がかかりそうだし、良ければ君の部屋まで案内するよ」

渡にわたり船だと、ぼくは謹んでそのお誘いを受けたのだった。



「……あれ？」

フジキセキ先輩に部屋へと案内されたぼくの第一声は、そんな素つ頓狂な声だった。

理由は……部屋にぼくの分の荷物しか置かれていなかったからだ。

通常、日用品の類は入学前に学校を通して運送業者へと依頼することになっており、入学式当日……つまり今日までには届くようになってははずだ。

だというのに二人部屋ほどの広さに関わらずあるのはぼくの荷物だけ。ルームメイトと思わしきウマ娘の分がなかった。

「ああ。君のルームメイトだが、荷運びの手続きに不備が生じてね。少しばかり遅れて来ることになっている」

な、なんだって……。

フジキセキ先輩の衝撃的な告白に思わずぼくは項垂れてしまう。

ルームメイト…パジャマパーティ…新しい友達…ああ、ぼくの想定していた学園生活の始まりがこんな形で崩されるなんて……。

「……大丈夫かい？」

「はい……大丈夫です……多分……きつと、メイビー……」

「そ、そうか。まあさつきも言った通り手続きの不備で少し遅れて来るだけだから、あまり気を落とさないでくれ」

すると項垂れるぼくの姿を見かねてか、フジキセキ先輩は話題を変えるように咳払いをした。

「そうだスローダンサー。明日の選抜レースはどうするつもりだい？」

「選抜レース……ですか？」

選抜レース……入学式では聞かなかった話だな。

名前からして何かしらの選考であるとは思っただけど……詳細までは分からない。

キョトンと疑問符を浮かべるぼくに対して、フジキセキ先輩は懇切丁寧に説明してくれた。

なんでもこのトレセン学園では年4回に分けて『選抜レース』というものが行われ、ここで参加するウマ娘達の走りを見てトレナー達がチームへのスカウトを行うそうだ。ちなみに、新入生だけでなくチームが決まってない先輩ウマ娘の方々も毎回参加しているらしい。

年4回のうちの今回の選抜レースは例年入学式の翌日に行われるようで、寮長であるフジキセキ先輩からその説明と参加志望の有無をこうやって確認しているとのことだ。

「それでどうする？明日の選抜レースへの参加は」

そんなの、答えはもう決まっている。

「勿論、出場しますー！」

入学早々そんな『チャンス』が訪れるなんて願ってもないことだ。

その選抜レースで結果を残すことができれば、チームへ加入しトウインクル・シリーズへの参加も可能となるのだから。

ぼくの答えにフジキセキ先輩は笑みを浮かべ“分かった”と答えると、適正の距離と

バ場について聞いてきたので、ぼくは“中距離か長距離、芝のバ場”を希望する。

「それじゃあ他の新入生にもこの説明をしてくるから、これで失礼するよ」

フジキセキ先輩も退出し、この一人だけでは広すぎる部屋にぼくだけが残る。

それからぼくの実家から運ばれてきた荷物の整理などをしていたらいつのまにか午後の9時になっていた。

明日の選抜レースに備え少し早く寝ようと考えたぼくは、シーツを敷いたばかりのベッドに横になり、瞳を閉じ『これから』について思案しながら……意識を暗闇の中に落とした。



『『決着』をつける『権利』は——僕にだけあるッ』

『来いッ！ジョニー・ジョースター！『決着』は、止まる時よりも『早く』つくだろうッ』

——夢を見る。

『炸裂しろ——『ACT 4』ッ！』

『THE WORLD』——オレだけの時間だぜ』

——夢を見る。

『ぐっ……うわあああああッッ！』

『『回転』は——お前自身が喰らえッ！』

——夢を、見た。

「……っ……は、あ……はあ……っ」

悪夢から、目覚める。

そよ風の涼しい春の夜だというのに、ぼくは瀑布のように汗を流しベッドのシーツを湿らせていた。

今の夢を見たのは、随分と久しぶりのことだった……多分数年ぶりくらいだろうか……あの『敗北』の夢を見るなんて……

「……………ごめん、なさい」

『勝利』まで後一步。ニューヨークのブルックリン橋で犯したぼくの『失態』……ああ、ごめんなさいジョニー……ぼくがあの一瞬だけでも『シルバー・バレット』を上回っていたなら……『無限の回転』を恐れず『ぼく』が君を背に乗せることができたのなら……もしかしたら君は『Dio』に……

どんなに『後悔』したとしても結果は変わらない。確かに、ジョニーはあのレースで掛け替えないものを手に入れた。

ジャイロとの友情、別離した父親からの声援、再び『歩き出す』ための意思。

もし今レースについて彼に聞くことができたとしても、ジョニーはきつとはにかみながら『満足』したと答えるかもしれない。

でも……それでも本当ならば……スローダンサー^ほは君に『勝利』をプレゼントした

か
つ
た。
S
B
R
レースという果てしない航路における栄光ある『勝利』を…君に……。

ステイール・ポール・ラン

— THE WORLD
世 界は “ぼく” を嘲笑う。

— THE WORLD
時 間は、決して巻き戻らない。

『運命』の残酷さを噛み締めながらぼくは、再び微睡の中に沈む。



『選抜レース』当日——ぼくは学園のレース場で準備運動ストレッツをしていた。
周りにはトレーナーと思わしき人間と沢山の野次ウマ娘の先輩方。

これだけ多くの人たちに見物されるとは思ってもおらず、少し緊張してしまう。

ぼくが出場する第4レースまではあと少し。ぼくの枠版は“3番”なので、3と書かれたゼッケンを着てシューズにつけた蹄鉄の確認を最後にする……うん、ぼっちし。

呼吸も安定しているし疲労感は全くない、全力の走りを披露できるコンディションだ。

『これよりトレセン学園、第4選抜レースを開始します。出場者の方はゲートへとバクシンしてください！』

ゲートにバクシンってなんだ……と思いながらも、自分の出番を察し案内に従ってゲートに入る。

従来のレース場と同じく学園の模擬レース用トラックにはゲートが設置されており、芝を踏みしめ構えをとるのはぼくを含め9人のウマ娘。

みんなこの一握りのチャンスにキラキラと目を輝かせていた。

『今日4度目の選抜レース！実況は引き続き続き学級委員長としてこの私、 “サクラバクシンオー” が務めさせていただきます！』

……学級委員長と実況に何ら関連性も見出せないけど、熱気を醸すバクシンオー先輩の言葉に外野も盛り上がりを見せていた……ん？なんか焼きそば売ってるウマ娘いない？

『それでは各ウマ娘、ゲートに並びました！』

そして、実況の言葉に——ぼくは意識を切り替える。

行うことはただ一つ。極限までの『集中』……ただそれだけ。

ゲートが開くその一瞬まで神経を研ぎ澄ませろ、集中を乱すな。

それはぼく以外も同じ。並ぶライバルたちだけでなく、このレースを見定めるトレーナーにウマ娘たちも一言だって言葉を紡がない。

研ぎ澄ました神経が、『集中力』を極限まで高めたその刹那——ゲートが開く。

『さあ各ウマ娘、きれいなスタートを切りました！』

まず序盤は様子見、終盤まで中位の位置をキープし脚を溜めて終盤で一気に——ッ!
 『な、なんと!…この序盤で…最初のコーナーすらも曲がりきっていないこの序盤に!一人のウマ娘が圧倒的^{パッ}速度^{シン}で前に躍り出ました!』

それは、『ありえない』選択としかいえなかった。

確かに『逃げ』の選択を行うウマ娘なら、序盤から先頭を走ること十分わかる……
 だけど『この状況』で『あれ程の速度』を序盤に出していることが問題だ。

この選抜レースの総距離は東京レース場の日本ダービーと同じ2400メートル……つまりは『中距離』のレースになっている。

それに対して前方のトップを走りぬける“5番”のゼツケンを纏ったウマ娘の速度^{ペー}は素人目に見ても短距離^{スプリ}走者^{リント}のそれだ。

間違いなく——終盤で『バテる』。

『最初のコーナーを曲がりトップの“5番”と後続の差は7…いえ8馬身程!このペースで大丈夫なんでしょうか!?それはそれとしてあのスピード!是非共にバクシンしたいものです!!』

……『できるわけがない』それがぼくの見解だった。

恐らく相手はペース配分を考えてない若輩者か、もしくは事前の距離選択を間違えたうっかりさんか……なんてことを考え、ぼくは自分の走りに集中する。

思考の海の中でもぼくは自分のペースをキープし、第2コーナーを曲がり今は4番手、先頭の“5番”はまだトップを独走しているが……もうすぐ第3コーナー。短距離のレースと同じ距離まで走れば、すぐに“5番”も『バテる』だろう。

そんなぼくの判断は——すぐに間違いだったと思い知らされる。

第3コーナーを曲がって直線、後は4コーナーと直線の残り数百メートル……だけど、それなのに、先頭の“彼女”は——ッ！

『第3コーナーを曲がった現在、先頭の“5番”は驚くべきことにほとんど速度が落ちていませぬ！直線をほぼ変わらぬ速度で疾駆しています！』

先頭のウマ娘は、規格外の持久力スタミナを有していた。

差は五バ身ほどに縮まったが、遠目に見る限り「5番」は第3コーナーから今の直線までの1600メートルほどの距離を『バテる』ことなく走っていたのだ。

恐らくあれは天賦の才…天性の肉体とでもいうべき『才能』…ッ！

持久力に特化した駿バの姿はまるで——『あのレース』で見てきた一級品サラブレッドのようだった。

『おおっとー……ここでトップの「5番」に追いつこうと次点の2番と7番が、さらには後続のウマ娘たちが速度を上げてきました！』

トップを独走する「5番」の走りに焦りを覚えてか、ぼくの横に並んでいたウマ娘や後塵を拝していたウマ娘たちがペースを上げてきた。

いいや、違う。それじゃあダメだ。

貴方達のそれは先頭の「彼女」のように得意を武器としたものじゃない……ただ焦りに身を任せている『掛かった』状態だ。

『しかし追いつけません！むしろペースを乱し失速しています！』

まだだ、まだ脚を溜めろ。

単純な走力と持久力で戦おうとするな、思考を最後まで停止するな——ツ！

——思い出せ、ぼくの本質を。

あのSBRレースで、あの過酷な旅路で、あの死闘の中で——どうやって「ぼく」は
駆け抜けることができた？

他の競走馬よりも桁外れの持久力スタミナを有していたからか？

優れた最大速度スピードを叩き出したからか？

ライバルどもを弾く底力パワーがあつたからか？

違う、違うだろう鈍間スローダウンな踊り手。

「ぼく」は非力だった。

「ぼく」は天才じゃなかった。

「ぼく」は優れた血統じゃなかった。

そうだ……駄馬として売られた「ぼく」にはそんな『特別』なんて存在しなかった。それでもッ！それでも「ぼく」は……鈍間スローダンサーな踊り手はあの一級品サラレッドたちを相手に競り合えたじゃないかッ！

——思い出せ本質を。思い出せ……あの言葉をッ！

『その馬の選択は……正しい』

1890年の夏——そのビーチには『美しいもの』が確かに存在した。

暗闇の中に見える『美しいもの』……。

「ジョニイ」がその『美しいもの』に惹かれて、『希望という光が存在する』のかを確かめる道程で——「ぼく」も彼に出会った。

『老いた馬には『経験』があり困難を乗り切る『賢さ』がある。

後先考えず突つ走る無謀な若い馬よりもよっぼどな……』

始まりサンディエゴの地で出会った、先祖から『回転』を受け継いだ男……ジョニイと「ぼく」にとつ

ての『希望』——『ジャイロ・ツエペリ』の言葉が脳裏に蘇る。

『経験』を糧に今を走れ、『知恵』を武器に天性の肉体を凌駕しろ。

『あの走り』を思い出せ……『黄金の回転』に導かれた最高の形を……不完全でもいい、ぼく自身が『良い』と思うように走れ……ッ！

『観察』とは——『見る』んじやあなく『観る』んだ……『聞く』んじやあなく『聴く』んだ。

三バ身先を走る競争相手のフォーム……手の動き、脚の踏み出し方に上げ方に動かし方——網膜の視細胞に酸素を回し、その一挙手一投足を余さず『視ろ』。

王道を疾駆する目の前のライバルの走り……芝生を踏みしめる蹄鉄の音に空気を震わす呼吸音……限界まで聴力を引き出し全てを『聴け』。

——『観察』しろ『奴』の『クセ』を、想起しろ逆転への『道』を。

轟く実況だけでなく先輩方の歓声、極限まで『彼女』以外の情報。その全てを『削ぎ落とし』……その果てに——ぼくは、気づいた。

彼女の身体が一瞬、左にぶれたことに。

「まさか」

その『クセ』が及ぼす影響はほんの些細なもの。少しばかり…本当にほんの少しばかり「彼女」の速度が落ちるだけのもの。

だけどぼくは、スローダンサーはその『クセ』に既視感を覚えた。

「」

—— 3呼吸、4呼吸、5呼吸……。

ぼくは限界まで耳を酷使し「彼女」の『呼吸音』を聴きながら、『数える』。

—— 6呼吸、7呼吸……。

8呼吸目……身体が左にぶれる。

——嗚呼、そつか……。

ぼくだけじゃなかった…『君』も此処にたどり着いていたんだね……。

なら、余計に負けられない。

この世界にぼくたちの手綱を握る騎手ジョッキはいない、全てが自分の実力次第……だからぼくは、だからこそ…『ぼくだけの力』で君に勝ってみせるッ！

『トップの〃5番〃と次点の〃スローダンサー3番〃の差は三バ身ほど！これは〃5番〃の逃げ切り…ッ!』

——5呼吸、6呼吸、7呼吸……。

『い、いえ待ってくださいッ！差が……差が縮まっていますッ!』

8呼吸目、ぼくは加速する。

——『クセは直らない…宿命のようにな』

脳裏にいけ好かない“Dio”の言葉が過ぎるけど、本当にその通りだと思う……
『クセ』は直らない…例えそれが前世からのものであっても。

——6呼吸、7呼吸、8呼吸……加速する。

『一体どんな魔法を使ったのでしょうか?!』

あれほどあった“5番”のリードは“3番”に縮められその差一バ身ほどに——』

魔法なんて大袈裟なものじゃない。ぼくはただ、タイミングを見計らって加速しただけだ。

“彼女”の『クセ』は8呼吸目で身体が左にぶれるということ、そうならば当然『重心』もズレ、速度も僅かながら落ちる。

——5呼吸、6呼吸、7呼吸……。

その一瞬とも思える刹那のみぼくが加速すれば、無駄な労力アシを使わずに“彼女”の速度スピードに追いつくことができる。子供でも分かる簡単なことだ。

——8呼吸目、ぼくは再び加速する。

『な、並びました——ッ!! 圧勝と思われた“5番”に、終盤の直線で“3番”が並んだ——ッ!! 何というバクシン!!』

……問題は此処からだ。

最後の……それも半分走り切った直線。距離は200メートルあるかないか……この速度なら間違いなく、今から8呼吸目を終えるまでにレースは終わってしまう。

だから、此処からは地力の勝負だ。

横目でチラリと並走する“彼女”の姿を窺う。

腰元まで伸びた栗毛を靡かせ、端麗な顔に『獰猛』な笑みを浮かばせていた。

まるで『楽しんでる』かのようだ——ああ、本当に君らしい。

絶対に負けない、負けられない、負けるもんかッ！
ぼくの全てを……ウマ娘としての全身全霊を君にぶつけるッ！

残り100メートル。

『5番』と『3番』ッ！ 並んでいます、差なく並んでいます！ この直線で両者追
い抜けるでしょうかッ！』

残り50メートル。

『5番』が抜いた！ 正真正銘の全霊を懸け、『5番』が再びトップに——いや、『3番』
も負けじと差し返す！ まさに五分五分の勝負……学級委員長であるこの私の目をもつ
てしても結果は分かりませんッ！』

残り30メートル。

『5番』か！ ……『3番』か！ 差し差されの激戦を制するのは一体どちらに——』

熱気を帯びた実況が、歓声が耳に届き終わるよりも先に……“ぼく達”はゴールラインを踏み越えた。

『決着————ッ！』 『トウインクル・シリーズ』を想起させる激戦を制した一着の勝者は——』

呼吸が苦しい。動悸も激しい。身体中が酸素を求め肺が痛み、視界はチカチカと点滅し、今にも倒れてしまいそうなほどの真正正銘の全身全霊。

“今の” ぼくの全てを振り絞った『勝負』の『結果』は——

『ゼツケン番号5番—— “ヴァルキリー” さんです！』

ぼくの、敗北だった。

『ハナ差で二着は “3番” のスロウダンサーさん！』

まさかの新生2人が後続に大差をつけてワンツーフィニッシュです！ 何というバ

クシンっぷりでしょうか!』

でも、不思議と後ろ髪を引かれるような感覚はない。

勿論悔しかった…あと少しの僅差だったのになって。でもそれ以上にぼくは——この全霊を出して競り合った結果に『納得』していた。

『納得』は全てに優先する。結果に納得することが出来るからこそ『前』へ進むことができる。『どこか』への、未来への『道』も探すことができるんだ。

ああ、でもやつぱり——くやしい、なあ……っ。

無念のうちで『敗北』を噛み締めるその時——

「——Lesson 5」

声が、聞こえた。

息が切れて絶え絶えななかで疲労の蓄積した体を無理矢理起こし前を向くと、栗毛の長髪を靡かせた勝者——ヴァルキリーが、ぼくを見ている。

「この言葉の意味が分かるか？」

まるで試すようにヴァルキリーがぼくに問いを投げる。

ぼくは、思考するまでもなく即答しようともはや反射の勢いで口を開いた。

「『一番の近道は遠回りだった』……『遠廻りこそが最短の道だった』……」

「――」

驚いたように目を見開く彼女に、少し笑みが溢れてしまう。

ははっ、なんて簡単な問題クイズだよ……何度もジョニイを救つてきた彼の言葉ジャイロを、ぼくが忘れるわけないだろう。

「この言葉があつたからジョニイは自分の原点オリジンである『Lesson1』を思い出すことができた。

この言葉があつたからこそ、『ジョニイ』は『ジャイロ』に『ありがとう』と『さようなら』を告げることが出来た。

そうだろう——ヴァルキリー戦友

「……まさか、〃オレ〃以外にもお仲間がいたとは驚きだ」

「そう思うなら手を貸してくれ、年寄りにあの走りはキツすぎた」

「ハッ！ バ鹿言えよ、そんな可愛らしい姿すがたで言われても説得力がねえぜ」

揶揄うように笑いながらも、ヴァルキリーはぼくに手をよこす。

「久しぶりだな、スローダンサー爺さん」

「久しぶりだね——ヴァルキリー若いの」

前世から数えれば数十年振りに——ぼくは戦友との『再会』と『初めて』の握手を交わした。